特別企画　JCCA × JIA 両会長対談

「美しい国づくり」をみんなの力で

～土木と建築が手を携えて進めよう～

大島一哉
OHSHIMA Kazuya
（建設コンサルタンツ協会（JCCA）会長）

芦原太郎
ASHIHARA Taro
（日本建築家協会（JIA）会長）

建設コンサルタンツ協会（JCCA）の「美しい国づくり専門委員会」は、2004年に日本建築家協会（JIA）との共同宣言『「美しい国づくり」をみんなの力で』を受けて、その年に発足しました。その後、2009年からはシンポジウムの開催を協働で行い、2014年までに合計6回の協働シンポジウムを開催しました。そして、震災復興及び2020年の東京オリンピックの開催を鑑みて、新たな目標と協働の意義を確認し、設計・コンサルタント業務の重要性を発信する必要があると考えました。

そこで、一般市民に広く社会資本の重要性を理解いただくため、土木・建築の枠を超えた都市や街づくりを推進するべく、両協会協働で基本的な考え方を整理して、会長対談を行うことにより今後の行動の方向性を示唆し、建設業界における設計・コンサルタント業務のプレゼンスを発信することにしました。また、継続して協議する体制や行動の具体的な実践の方法等の確認も行います。

2020年の東京オリンピックに向けて

――1964年の東京オリンピックの時は、日本は高度成長期にさしかかるところで、東海道新幹線や高速道路、東京モノレールなどができました。それから50年経って、いま日本はどのようになったのでしょうか。美しい国になったのでしょうか。それを世界に見せるのが次回の東京オリンピックの大きな目的かもしれません。それには両協会で協働しなければならないと思いますが、いかがでしょうか。

大島　東京でのオリンピックは2回目になります。1回目は日本が戦後の復興を経て、これから発展・成長していく姿を世界の人たちに見せようというねらいがあったと思います。私は、その時はまだ高校生でしたが、その当時の土木を担っていた人たちは、おそらくそういう気概を持っていたでしょうし、成功を喜んだでしょう。

そう考えると、果たして今度のオリンピックでは、いったい何を世界の人たちに見てもらい、評価してもらうのか、あるいは訴えるのかが大事ではないかと思います。早くそれを国民みんなが共通のものとして持つ必要があるのではないでしょうか。オリンピックまでの期間は短いですが、努力をする必要があります。そのなかで、我々に何かできることはないだろうかと考えています。

いまのところ、一番お金がかからず簡単にできることは「おもてなし」です。これまで、両協会で「美しい国づくり」というテーマでいろいろと議論してきました。例えば、何か新しい姿やテーマを出して、それを国民の皆さんに訴えるとか、すぐ形にするのはなかなか難しいですが、完成途中の姿であっても、世界から日本にいらっしゃった方々に、感じてもらう「何か」が必要ではないでしょうか。それを評価してもらえば、我々も元気が出ますし「じゃあ、続けていこう」となります。いろいろと皆さんのご意見をうかがって、具体的な行動に移すことが必要と思います。

芦原　まさにオリンピックというのは非常にいい機会ですね。1964年の東京オリンピックの時、僕は中学2年生でした。代々木競技場の脇で地元中学生として国旗を掲揚したことを覚えています。当時の東京はまさしく高度成長期で、これからすばらしい都市ができていくのだろうなという期待感がありました。まさに『三丁目の夕日』の時代でした。

普段「美しい国づくり」と僕たちが一所懸命に言っても、市民の人たちになかなか理解してもらえません。世界からお客様が来る時には、日本人はやはり「国」を意識しますし、オリンピックでは日本を応援しているわけですから、「日本は美しい国をつくっていくんだ」と訴えるのには絶好の機会だと思います。

前回のオリンピックの時の社会は経済成長一辺倒で、とにかく都市を機能的・効率的に、いかに拡大して活性化させようかという時代でした。しかしいま、成熟社会を迎えたといえる東京では人口が減少するなかで、どうやってうまく都市を縮小するかを考えていかなければならない時代です。施設・建築・土木・公共インフラすべてにおいて、どういう形で「美しい国づくり」を進めて、社会資本をどうやって整備し維持管理していくのか、おそらく大きな転換点に来ています。ですから前回のオリンピックの時とは少し違った考え方が出てきて、美しい日本としての次のステップに入っていくのだと思います。

ひとつの例として、2012年のロンドンオリンピックがあります。ロンドンは、その前のオリンピック開催地であった北京のようにこれから拡大する都市ではありません。競技場なども仮設にしておくなど、設備投資を非常にコンパクトに抑えて、既存の施設を有効に使い、オリンピックが終わったあともその都市がうまく動くように考えられていました。成熟した都市でのオリンピックの成功例と言われています。ですから、東京も北京型ではなくて、ロンドン型オリンピックの知恵を学ぶ必要があるのではないでしょうか。

ロンドンオリンピックが成功した理由のひとつに、イギリスに以前からあるCABE（Commission for Architecture and the Built Environment：英国建築都市環境委員会）という組織のはたらきがあります。CABEは既存の地域の現状を分析し、市民にわかりやすく情報を公開しながら、開発による影響をチェックするなどの活躍をしています。私たちJIAはCABEについても、いま一所懸命に勉強しています。

CABEの正式名称の中の“Built Environment”に相当する言葉が日本語にありません。直訳すれば人間構築環境となるのでしょうが、「美しい国づくり」「美しいまちづくり」「美しい建築づくり」などいろいろ言い方はありますが、ちょうど良い言葉がないのです。ところがイギリスには“Built Environment”という概念がちゃんとあります。僕らもこれを学んで、建築・都市・土木も含めて、これが“Built Environment”なのだと確認し、ぜひ手を握って「美しい“Built Environment”づくり」をやりたいと思います。

明治維新の時に、“Architecture”や“Environment”を「建築」や「環境」という日本語に苦労して翻訳しました。ですから、2020年に向けて“Built Environment”という言葉を適切な日本語に訳して、その概念を一般の方々にも分かるような言葉で発信できないかと思っています。「みんなで頑張りましょうよ」と、多くの人が分かるような言葉にしたいのです。

美しい東京とは

――日本に来る多くの外国人が「東京は美しい」と言うそうです。以前シンポジウムである人が、「ゴミが落ちていないことや、泥棒がいないことが美しい街だと勘違いされているのではないか」と言いましたが、まさしく、建築も土木も街並みとしての美しさをつくっていくことが大事なのかもしれません。

芦原　僕もこの前本を読んでいたら、江戸末期から明治初期に日本に来た外国人は、東京がいかに美しい街か、みんな驚いたというのです。そこにいる人々も、みんな貧しくても清潔にしていて礼儀正しいし、ちゃんと規律を守っている。こんなすばらしい国があるだろうか。そこを西洋のいろいろな文明で毒してしまって果たしてよいのだろうかと、当時の外国人たちは考えたという内容でした。

しかしいまから、昔のように木造の小さい建物がたくさん並んでいるような東京に戻すわけにはいきません。ではこの東京の街は実際に美しいのでしょうか。僕ら建築家が、いわゆる街並みという意味で考えると、パリの整然とした街並みに比べたら、東京は秩序がない、色や形もいろいろ、これはちょっと恥ずかしい街だと思ってしまいます。私の父・芦原義信の本『街並みの美学』の中でも東京は、見た目に秩序のない街だと述べています。

ところが、外国人の中には「東京は面白いのではないか」と言う人もいます。東南アジアのカオスの中は、いろいろなもののエネルギーであふれていて、逆に言うと何でもいろんなことが自由にできて、活気あふれる街であり、「なかなか魅力的じゃないか」という見方もあるのです。そうなると、何が本当に美しいのだろうか、考えなければいけません。

大島　私は「美しい」とは文化や個性だと思います。そこの区域や空間の中で、何か訴えるものがあればいいのだと私は思います。最近の街並みはなんとなく散漫な感じがして、同じようなものがただズラッと並んでいるだけのような気がします。だからといって、個性があるからいいとも一概には言えませんが…。

個性的なものが出てきた時は、それに合った街並みになればいいのではないでしょうか。ただ、そこはある程度住民の皆さんの合意が必要だと思います。そして、一番大事なことは、住民の皆さんが参加することだと思います。

芦原　自分たちの街を「こうしたほうがいいよね」「このほうがきれいだね」という答えが、だんだん積層していくことが大切ですね。

水を活かす

大島　私の専門は河川工学で、河川の水質を良くするためにどうしたらいいか取り組んできました。じつは、東京オリンピックの時は隅田川がものすごく汚れていて、応急処置として浄化用水を緊急用水として、まず利根川から荒川へ、さらに隅田川の上流の新河岸川へと流して、臭いが出ない程度に水をきれいにしたのです。

芦原　オリンピックに向けて、そういうことをやられたのですね。

大島　オリンピックの後、実際に隅田川の浄化検討をやらせていただきました。私の個人的な夢は2020年の東京オリンピックの際に、こんなに大都市なのに水がきれいだということを世界に見せることができたらと思っているのですが、それはもう間に合わないでしょうか。

芦原　まだ大丈夫です。

大島　隅田川くらいならできるかもしれませんが、本当は東京湾で泳げるようにしたいです。こんなに大きな都会のなかで、すぐそばに泳げるところがあるといいなと思います。ヨーロッパに行くと、水辺を大事にしている様子を見ることができますからね。

芦原　そうですね。都市の中にある水辺を大切にしています。

大島　テムズ川も水は汚いですが、いろんな船が行き交っていて、夜も結構賑わっています。東京でも水辺の地価が高くなっていますし、地形を考えると水質ももちろんですが、水辺の空間をもう少しきれいにして活用することもひとつのテーマと思います。いろいろな提案や工夫をすることは、市民の共感を得るでしょうし、いいことではないかと考えています。

芦原　私もオリンピックを機会に、水辺を復活する方向で東京の街ができてくるというのは、すばらしいことだと思います。私の自宅は代々木上原で、すぐ脇に玉川上水がありますが、1964年のオリンピックの時に全部暗渠になってしまいました。昔は玉川上水からあふれてくる水や、新宿御苑から出てくる水、どこかのお屋敷から湧き出る水が、集まって海まで行っていたのが、いまは暗渠になっています。童謡『春の小川』に歌われた渋谷川を復元していこうと運動しているグループもあります。

　そのように具体的な環境が少しずつ変わってきて、水辺がより身近な場に出てくると、自分たちの環境が良くなったという意識が働いて非常に分かりやすいです。そしてそれが部分部分の点ではなくて、ネットワークでつながってきます。

大島　川というのは線ですからね。

芦原　線が面になって広がっていきます。ただ、東京都が蓋をしてしまった川を一部でも開ける秘策を、オリンピックを機会に始めてはどうでしょう。

大島　局部的には簡単にできます。

芦原　ソウルの清渓川（チョンゲチョン）のような大きな国家プロジェクトとして進めるのも、もちろん大事ですが、それではなかなか動かないので、もう少し身近なところでできるといいですね。

大島　ひとつの川だけでも再生することができればと思います。

芦原　今度のオリンピックに向けて、とても大きな新国立競技場が建ちます。じつはあの周辺が新宿御苑からくる水系の場所なのです。ですから、オリンピックを機会に暗渠を小川に復元してきれいな環境をつくれないものでしょうか。

大島　ちょうど開催されるのが夏ですから、やはり水があるほうがいいですね。日本橋川の上の高速道路を、ソウルのように外してみたらどうかという話も現実に出ていますが、オリンピックまでに具体化することは、なかなか時間的に間に合わないでしょう。

芦原　高速道路のシステムまで全部変えることは、ちょっと大変です。

大島　ただ、そのようなことを私たちのほうで議論して、こういうことができるのではないかと示して、市民の皆さんや地域の方に訴えていく。そして地域の方が参加する形で、例えば再生や復活するようなことをやれば、ものすごく盛り上がるのではないかと思います。2020年ですから、あと6年くらいですね。

芦原　そういうステップから、だんだんその先につながっていって、東京の水系が復元していくのも魅力的ですね。

大島　その時は、ぜひ両協会合同でいろいろな検討や提案をして、できるだけ多くの他の団体の方とも関わっていきたいと思っています。

土木と建築

――両協会が合同で検討や提案をできればと思いますが、どうも一般には建築と土木やコンサルタント、エンジニアはあまり仲が良くないと思われています。この対談を機会に、日本人として協働してできることをいろいろ考えていきたいと思います。

芦原　たしかに、大学でも土木と建築は分かれていて、そもそも違うものだという教育を受けてきました。社会に出ても土木と建築は別と見なされていますし、行政の発注も土木と建築では明らかに別物ですよね。

大島　私はいまマンションに住んでいるのですが、ある日その理事会に出席して奥様方と話をした時のことです。「世の中は建築と土木の分野がある。簡単にいえば建築は建物で、建物以外の例えば橋梁などのいろいろな構造物は土木がつくる」と話したのです。そうしたら「ウソでしょう。建築の人が考えて、土木の人はつくるだけでしょう」と言うわけです。「ああ、なるほど。こんなふうに勘違いされているんだな」と思いました。「いや、違うんです。ちゃんと土木も設計しているのです」と言いましたが…。

芦原　確かに一般の方の認識はそうなのかもしれません。

大島　土木が何をしているのか、よく理解していただけていないのは、我々にも努力が足りないのかもしれませんね。市民の皆さんに理解してもらわないと話が進まないことも多くあります。例えば道路などをつくる時には住民の皆さんの意見を聞きますし、一番そういう仕事で大きなものはまちづくりでして、いろんな住民の方に関わっていただき、その中で私たちの仕事を説明して理解していただかなければなりません。ぜひ建築の方々と一緒に住民の皆さんにPRして、一緒につくっていくことを考えていきたいと思っています。

芦原　建築関連5団体（日本建築士会連合会、日本建築士事務所協会連合会、日本建築家協会、日本建設業連合会、日本建築学会）で、いま建築・まちづくりを一緒に手を携えてやっていこうというところまでは来ています。建築・まちづくり、そして国づくりという中で、いろいろなレベルがありますが、全部つながっているわけです。そこでは土木とも手を組んでいく必要が大いにあるでしょう。おそらく、まちづくりのところで一番合流してくると思います。

　「美しい景観」と言っても「日本の景観はこれだ」と一義的に言えるわけはなくて、それは、それぞれの地域の中で一つひとつ考えていくことです。そういう面でも、確かにオリンピックは特に土木と建築、地域が絡むし、国民がみんな見ているという国という部分でも絡むし、ちょうどいいタイミングですね。

協働の方法

――まちづくりに対しての仕組みや仕掛けを、実際にどういうふうに両協会が協働すればいいでしょうか。そこをクリアにしないといけません。

芦原　例えば、私どもが考えているひとつは災害復興です。東日本大震災では一気に街が壊滅してしまいました。街というのは土木・建築、あるいは一つひとつの建物だけではなくて、全体がつながっていたのだと住民は分かっています。それを復興したいという強い思いがあります。

　具体的には、復興CABEと言っていますが、CABEのような形で復興活動ができないかと、個別でJIAの会員がいま頑張っています。災害復興まちづくり協議会のようななかに、建築家や土木の専門家など、いろいろな人たちが入って市民と一緒に自分たちの街をこうしていきましょう、という議論をすでに始めているところもあります。しかし、制度的にはなかなか進んでいません。仮設住宅や防波堤をつくる話にとどまっていて、街全体をどううまくつくっていくか市民の合意形成を含めて、いろいろな専門家がうまく協力し合う形にまだあまりなっていません。何か突破口になるような具体的な成功例をつくっていけないかと考えています。もし良い成功事例ができれば、別にこれは災害復興のみならず、ごく普通の街も、自分たちのまちづくりを考えるなかで、建築だけでは駄目で、都市計画・土木、いろいろな専門家が一緒になって、少しでも良くしていく運動につなげていく形にしたいなと思っています。

大島　賛成ですね。実際にJCCA会員の会社が現在、そのようなまちづくりに、いろんな形で関わっているのです。いわゆるCMr（コンストラクション・マネジャー）として町や市のために、いろいろ技術的なアドバイスをしたり、調達のお手伝いをする場合もあります。その際、ボランティアのような慈善事業ではなく、対価を得ながらどのようにプロジェクトのなかに入っていくのかを考える必要があります。例えば建築家が主体でやっているプロジェクトに土木の人が入るとか、土木が主体のプロジェクトに建築の人が1人入ってもらうとか、そういうことをお互いにチャンスと捉えていくのはどうでしょうか。具体的なところで探してみるのがいいかもしれないですね。

芦原　一つひとつ個別にいろんなものが動いていますが、地域はひとつですし“Built Environment”は全部つながっているわけですから、それらの個別で動いているプロジェクトを市民と一緒にうまく進めていくような、そんなまちづくり協議会に僕たち専門家が入って、手を携えられるといいなと思います。

報酬を出せる仕組みを

――業務を協働していく際、大島会長のおっしゃるように、ボランティアというわけにはいきません。作業の報酬が必要になりますから、行政が出せるような仕組みを考えていかなければならないですね。

芦原　先ほどイギリスのCABEや災害の際の復興CABEの例を挙げましたが、いまJIAとしては、そのような仕組みとして日本版CABEをつくっていこうとしています。現在あるまちづくり協議会のように、行政と市民と専門家が一緒になって、自分たちの地域の問題を具体的にいろいろ考えていく、特に景観問題などに関して地域の中で議論していく場をつくっていかなければなりません。それにJIAも応援したいと思いますが、そのために公的なお金が出るような仕組みを、ぜひ行政につくってもらわないと長続きしません。

イギリスの場合は、国がお金を出してCABEという組織をつくり、その組織が各地域のまちづくり協議会のようなところに人材やノウハウを支援したりしています。日本でも、いままでの縦割りルートではなく、地域の市民たちに役に立っている専門家には、市民側からお金が出せるような流れをつくらないと、なかなか土木と建築が一緒にならないのではないでしょうか。ぜひ、CABEが市民の代わりにお金を出せるようなシステムができるといいと思います。

そのようなシステムを、国がやるのか、各都道府県がやるのか、いろんなレベルがあると思いますが、公的なお金がそういう地域の環境問題を考えるところに投入されて、そこで市民が初めて参加する。そのように説明すれば市民は分かると思います。役所は「情報は全部公開してある」と言いますが、それを見ても市民には何のことだか分かりません。でも「あなたの街のここがいまこのようになろうとしています」とか、「この場合、こういうことが考えられるし、もしそうでないとすれば、こうなんです。どうでしょう」というように具体的にちゃんと話をしていけば、市民も入ってこられます。そうなるとたぶん、市民も「こんな景観は嫌だ」というような率直な声が出せます。しかし、単に突然「景観についてどうですか」と言われても、答えようがないですよね。ですから、そこまで準備をしてお膳立てをするような制度や仕掛けを行政でも考えてもらいたいし、私たちのような専門家団体も、支援や協力をしたいと思っています。そこで、ぜひ、土木とも協力していきたいですね。

次世代につなぐ

――都市が縮退化していくなかで、日本の未来をつくっていくために、次世代につないでいくことをいろいろと考えないといけません。

芦原　いわゆる量的拡大に成長する都市ではなくなったわけですね。それでは、これから縮小といっても、縮んで消えてしまえばいいのかというと、そうではなく、持続可能性を考えながら、これからは都市生活の質的向上を図るべきだと思います。その時に、結果としてある種の縮小があったにしても、先ほど大島会長がおっしゃられたように、東京の水系が少しずつ復元され、大きな水の流れができて、環境がきれいになってくる。あるいは、東京には皇居の緑と日比谷公園、神宮外苑、明治神宮、新宿御苑など、意外に豊富にある緑がネットワークとしてつながってくるなど、大きなビジョンをもってスタートを切れれば、次の世代でも「この水系は最後は海まで流してあげよう」とか、「この緑のネットワークを小鳥たちも行けるようにしよう」とか、そういうなかで建築・土木がうまく入り込むことができるのではないでしょうか。

結果はコンパクトですが、小さくするのが目的ではなく、素敵なクオリティをつくっていくのだという話の糸口が見えたら、次の世代も大喜びで頑張ってやってくれるのではないでしょうか。「何をしても駄目なのでは」と閉塞状態になるのは困るので、2020年のオリンピックを機会に、そういう環境づくりがアジアの東京で始まったと、ぜひ言いたいですね。

大島　形をつくれば次世代の人もその意味が分かり、勉強することでそれを引き継いでいける、あるいは発展していけると思うので、そのきっかけのようなものをつくっていくことが大事です。つながりというか、線をつくっていくことは、いろいろな人に参加してもらううえで非常に有効な方法だと思います。そういう意味で私は専門の水とつながります。おっしゃるように、東京の緑の多さは大阪などと比べてもよく分かりますね。

昔の水辺をつなげて緑の線にしている市がありますが、そのような試みをしても、それを周りの人や次世代の人にも意味が分かるようにしないといけません。そのような仕掛けを常に考えていくことが「継承」であって、大事なことではないでしょうか。

芦原　次世代につなぐという意味では教育も重要です。JIAでも、子どもに向けた建築の教育や、いろいろなワークショップを行っています。例えば2011年に世界建築家連合（UIA）の東京大会が行われた時には、子ども向けの建築やまちづくりの活動や教材を広く公募し、優れた教育活動を表彰するゴールデンキューブ賞を設立するなどのさまざまな試みをしました。けれども、それはあくまでも建築の教育で、そこも縦割りになっています。自分たちが住んでいる建築や土木も、いろいろなものがある地域のなかでの環境教育というようにしないといけないですね。

PRも重要

大島　次世代の人に引き継いでもらいたいという前に、最近、土木の人気があまりないものですから、とくに若い人が土木の世界に来てくれないのです。ですから若い人に土木の世界に来てもらうために、いろいろな工夫をしています。

先日、建築の方が書かれた本を読んで感心したのは、1942年に建築学会が主催したコンペ・大東亜建設記念造営計画設計競技で丹下健三さんが優勝した際、学会が大々的に「こんなに若い次世代のすごい建築家が現れた」とPRしたそうです。それを新聞が取り上げでもすれば皆が注目するわけです。そうやってスターがつくられたのではないかと思いました。

そういうPRできるものをつくっていく必要性をものすごく感じました。我々も発注者に「建築のようにコンペをやったらどうでしょう」と提案することもあります。やはり世の中が注目するものを考えたいし、もし建築と一緒にできるようなものがあれば、ぜひやっていきたいと思います。土木の世界、とくに我々の世代は、黙って仕事をするのがいいという風潮があり、スターというものを嫌がるのかもしれません。

芦原　黙って、チャラチャラしてはいけない。建築家は結構しゃべりますからね。

大島　学生時代を思い返しても、建築の人はよく話していて、全然雰囲気が違うのです。土木が一時期ものすごく叩かれた時も、言い訳をせずに「ちゃんといい仕事をしていれば、いずれは分かってくれるんだ」と言っていたことがありますが、どうもいまは、いいものをつくったからといって分かってくれる世の中ではないですから、もう少し積極的にいろんな仕掛けを考えた方が良いですね。ただ、その時も、自分たちだけでやるのではなく、いろいろな分野とコラボレーションすることが効果的だと思います。

――パリのエッフェル塔を設計したエッフェルさんはエンジニアですね。いま、ヨーロッパの橋のコンペでは、エンジニアもアーキテクトも仕事を取っています。オルセー美術館前のソルフェリーノ人道橋は、マルク・ミムラムさんというフランス人エンジニアの設計です。建築と土木と両方で競っています。ですから日本でも街並みのコンペを土木と建築と一緒に企画するということは考えられるかもしれませんね。

大島　またそれをマスコミやメディアが取り上げてくれないとなかなか意味がありません。

改めて協働を誓って

芦原　今日は、建築と土木のつながりに気づくことができました。決して仲が悪いわけではなかったですね。

大島　おっしゃるとおりだと思います。我々もコンパクトシティを提唱したりしていますが、どうしても機能だけで考えてしまいがちです。それだけではなく、「こうしたほうが便利ですよ」「こうしたほうが効率的ですよ」など、もう一歩進んだ住みやすさやコミュニティについても考えていかなければいけない。そういうことはなかなか一人で勉強できないので、建築をはじめいろいろな方と一緒にやるのがいいのではないかと思います。

芦原　実際の地域や街の視点、あるいは市民の視点から考えると、自分たちの地域に何かがつくられている場合、これは建築と土木のどちらがつくったのかは関係ありません。それが本当のところではないでしょうか。ですから“Built Environment”という、建築も土木も一緒だという視点で僕ら専門家は一所懸命に頑張ってはいても、制度としては歴史的に全部分かれているので、やはりまず手をつなぐことが大事だと思います。お互い目指すところは一緒であって、素敵な地域や環境をみんなで手を合わせてつくっていく思いは、何ら変わりはありません。

大島　ぜひ、手を携えていきましょう。

――今日は大変有意義なお話ができました。ありがとうございました。

司　会

富樫茂樹
（建設コンサルタンツ協会 美しい国づくり専門委員会）

実施日：2014年2月28日
場　所：建設コンサルタンツ協会　会長室